

## 地域歴史講座「和田合戦」

### 第2回 和田合戦の虚像と実像

二〇二四年一月二日 高橋 秀樹

#### 一、京都からみた和田合戦

①『愚管抄』巻第六 実朝ハ又関東ニ不思議イデキテ、我が館ミナ焼レテアヤウキ事有ケリ。義盛左衛門ト云三浦ノ長者、義時ヲ深クソネミテウタンノ志有ケリ。タゞアラハレニアラハレヌト聞テ、ニハカニ建暦三年五月二日義時ガ家ニ押寄テケレバ、実朝一所ニテ有ケレバ、実朝面ニフタガリタ、カハセケレバ、当時アル程ノ武士ハミナ義時ガ方ニテ、二日戦ヒテ義盛ガ頸トリテケリ。ソレニ同意シタル兎玉・横山ナンド云者ハ皆ウセニケリ。其後又頼家ガ子ノ、葉上上人ガモトニ法師ニ成テ有ケル、十四ニナリケルガ、義盛ガ方ニ打モラサレタル者ノアツマリテ、一心ニテ此禪師ヲ取テ打出ントシケル。又聞ヘテ皆ウタレニケリ。十四ニナル禪師ノ、自害イカメシクシテケリ。其後ハスコシヅマリニケリ。

【原因】 義盛の義時に対する「ソネミ」（嫉妬）。

【経緯】 義時郎を攻めた。実朝が義時郎にいたので巻き添いになった。二日にわたる合戦の末に義盛は討たれた。義盛に同意した兎玉党・横山党も滅ぼされた。頼家遺児の擁立は和田合戦残党によるその後の行爲。

②『明月記』（藤原定家の日記）建保元年（一二一三）五月九日条 天晴る。（中略）今朝聞く、関東に勝事出来すと云々。【伝々の説】「和田左衛門尉某（三浦党と号す）・横山党（兩人ともにその勢拔群の者と云々）謀を合わせ、去る二日申の時、忽ちに將軍（源実朝）の幕下を襲う。その時將軍さらに警衛の備え無し。或いは杯酌淵酔と云々。忽然と周章して合戦す。その夜曙け、翌日また暮れ、旦て戦う。星を見るに未だすでならず。將軍と外舅相模守義時・大膳大夫広元等と、間行して山に入り、身を脱して隙去る。賊また大威を憚れて夜遂に引き去る。ただしことごとく城郭を焼く。室屋残り破れざるは無し。梟主金吾また戦場に死す。散卒船を儲け、海上より逃げ去る」と云々。天下の勝事何事かこれに過ぎるか。また【巷説に云く】、「彼の賊徒の党類・枝葉在京の者多し。かつがつ追捕・滅亡目前なり。京中また騒動す」と云々。衆尽き悲しみ来る。これ天罰か。窃かにこれを思うに、天下また無聊か。末代の貧者定めて餓死に及ぶか。嗟乎悲しきかな。（中略）

【戊の時ばかり参院す。中宮権亮（藤原信能）あらあら関東の事を語る。「二日申の時、和田左衛門（義盛）の宿所忽ちに甲兵の音を聞く。去春謀反の者結党するの由風聞・落書等有り。件の義盛その張本たり。しかるを自ら披陳す。子細を聞き、すでにもつて免許し、和解の気色有り。尋常の時のごとく近辺の宿所に在り。しかるをなお内々の議有り。鯨鯢たるべきの由これを聞く。ここによりさらに党を聚めその計らいを成す。これただもつて韓彭の蒞臨なり。その近辺の宿所の者（又左衛門尉）これを聞き、すなわち戎服を備え、使者を広元朝臣に発す。時に件の朝臣の賓客座に在り。杯酒まさに酣なり。亭主これを聞き、独り起座し、將軍の在所に奔り参る。相共にその所を逃げ去り、故將軍の墓所堂（七八町を去る。或いは二階堂と云う）に赴く。この間義盛の甥三浦左衛門義村（本より叔父と違背し、仇讐となる）義盛すでに出軍するの由を告ぐ。兩人の告げにより、母儀・妻室

等僅かに逃げ去るの間、義盛の兵すでに進む。先ず広元の宿所を囲む。酒客未だ去らず。大軍忽ちに至る。醉郷の士、数により害せらる。即ち放火しその城郭を焼く。室屋一字残らず。二日夕より四日朝に至るまで攻戦やまず。三たび華不注を周るが如し。義盛の士卒一をもつて千に当たる。天地震怒。この間千葉の党類（常胤の孫子）精兵を練り隣国より超え来る。義盛兵尺き矢窮まるといえども、疲足の兵に策ち、新羈の馬に当たる。然るになお追い奔り、北に逐つて横大路（鎌倉の前にこの路有り）に至る。この時義村の兵またその後ろを塞ぎ、義盛を大破す。ここにより遂に免れるを得ず。多くの散卒等浜に出で、船に棹し安房の方に向かう。その勢五百騎ばかり、船六艘。その後広元の消息の飛脚到来す。昨日申の刻ばかり参着す。その後経る所また音信無し」てえり。京畿に有る骨肉の輩、未だその存亡を知らず。在京の武士等下るべきの由を申すといえども、かつがつ天気有りて留めらる。京中警固のためなり。遠江守親広塔供養により在京し、去る二日下向す。これを聞き鞭を揚ぐと云々。或いは云く、近江守頼茂、去るころ下向し、最前に命を終えると云々。また侍従能氏（高能卿の子）正月のころ下向し、軍陣に死すと云々。相模国司の両息、親能法師の子、広元朝臣の子、皆死すと云々。実否を知らず。亥の時ばかり名調し了り退出す。

◎「伝々の説」「巷説」という噂話レベルと、後鳥羽上皇御所で藤原信能（能保の男）から聞いた信頼できる情報（幕府からの報告に基づく情報）から構成されている。ほかに広元から後鳥羽上皇への報告があつたこともわかる。

**原因** 二月の泉親衡謀反事件の「張本」が義盛であつた。弁明により実朝に許されていたが、幕府の議により滅ぼされることを恐れて挙兵した。

**経緯** 義時邸の近所の者が酒宴中の広元に報告、広元が將軍御所に赴き、共に頼朝法華堂（あるいは永福寺）に逃げた。もともと義盛と仲が悪かつた三浦義村が義盛の出兵を告げた。広元と義村の報告で政子と御台所は逃げる事ができた。義盛はまず広元邸を攻め、合戦は四日朝まで続いた。義盛は奮戦したが、義村軍に背後を塞がれ大敗して戦死した。五〇〇騎の残兵が六艘の船で安房に逃れた。

## 二、「吾妻鏡」を読みなおす

③『吾妻鏡』建保元年三月八日条 天霽る。鎌倉中に兵起こるの由、諸国に風聞するの間、遠近の御家人群参す。幾千万を知らず。和田左衛門尉義盛日ごろ上総国伊北庄に在り。このことにより馳せ参り、今日御所に参上す。御対面有り。そのついでをもつて、かつは累日の労功を考え、かつは子息義直・義重等の勘発の事を愁う。よつて今さらに御感有り。沙汰を経らるるに及ばず。父の数度の勲功を募り、かの両息の罪名を除かる。義盛老後の眉目を披らき、退出すと云々。

↓天候記載がある日記などの記録を原史料としている記事。文書などに天候記載はない。泉親衡謀反事件発覚（二月十六日）直後に義盛は動いていない。上総国に蟄居していたが、鎌倉で兵乱が起こり「いざ鎌倉」で駆けつける。実朝に対面した「そのついで」に子息二人の赦免を願う。実朝は独断即決で二人を許し、義盛も満足して帰って行った。↓この段階では義盛に不満はない。

④『吾妻鏡』同年三月九日条 晴れ。義盛（木蘭地の水干・葛袴を着す）今日また御所に参る。一族九十八人を引率し、南庭に列座す。これ囚人胤長を厚免せらるべきの由申請

するによつてなり。広元申次たり。しかるをかの胤長今度の張本として殊に計略を廻らすの旨聞こしめすの間、御許容にあたわず。すなわち行親・忠家等の手より山城判官行村の方に召し渡さる。重ねて禁遏を加うべきの由、相州（義時）御旨を伝えらる。この間、胤長の身を面縛し、一族の座前を渡す。行村これを請け取らしむ。義盛の逆心もとしてこれによると云々。

↓天候があり、義盛の装束も記されているから日記が使われている。その一方で和田合戦勃発を前提とした脚色も加えられている（胤長の面縛の話は、天候記載がない四月二日条でも繰り返され、文末には「逆心いよいよ止まずして起こる」とある）。

前日満足して帰った義盛が豹変、大事にしたため、実朝も広元を申次とする正式ルートで対応、要求を拒まざるを得なかった。前日夜に義盛を突き動かす何かがあった。

⑤『吾妻鏡』同年四月二十七日条 霽れ。宮内兵衛尉公氏將軍家の御使として和田左衛門尉宅に向かう。これ義盛用意の事有るの由聞こしめすにより、その実否を尋ね仰せらるの故なり。（中略）晩景また刑部丞忠季をもつて御使として義盛の許に遣わさる。世を度り奉るべきの由その聞こえ有り。殊に驚き思しめす所なり。まず蜂起を止め、退きて恩裁を待ち奉るべきなりと云々。義盛報じ申して云く、「上においてはまづたく恨みを存せず。相州の所為傍若無人の間、子細を尋ね承らんがため発向すべきの由、近日若輩等ひそかにもつて群議せしむるか。義盛度々これを諫むといえども、一切拘わらず。よつてすでに同心を成しおわんぬ。この上の事は力及ばず」と云々。

↓事件後、関係者の証言をもとに実検記が作成され、それが原史料となつたか。

義盛の発言の趣旨。実朝に対する恨みはない。義時が傍若無人なので、事情を聞くために行こうと一族の若者たちが密かに群議した。義盛は諫めたが聞き入れず、結局義盛も同意するに至つた。↓一族の若者たちに突き上げられた行動。三月八日夜にもこうした突き上げがあつたために、義盛は態度を変えた。

↓泉親衛事件の逮捕者も第二世代・第三世代の御家人が中心であり、御家人の世代間対立、義時の手法に対する若い御家人の反発があつた。義盛（六十七歳）は若い世代に擁立された旗頭に過ぎない。親衛事件で逮捕されなかつた相模・武蔵の勢力による大規模な事件。若者たちは義時・広元体制の転覆を狙つた。

◎幕府から朝廷への報告には、背景にあつたこうした若者世代の動きは書かれておらず、義盛の謀叛を前面に押し出していたので、『愚管抄』や『明月記』は、義盛と義時との関係だけでこの事件を捉えている。

⑥『吾妻鏡』同年五月二日条（冒頭部分） 陰り。筑後左衛門尉朝重義盛の近隣に在り。しかるを義盛の館に軍兵競い集まる。その粧いを見、その音を聞く。戎服を備え、使者を發し、事の由を前大膳大夫に告ぐ。時に件の朝臣の賓客座に在り。盃酒まさに酣なり。亭主これを聞き、独り起座して御所に奔り参る。次いで三浦平六兵衛尉義村・同弟九郎右衛門尉胤義等はじめは義盛と一諾を成し、北門を警固すべきの由、同心の起請文を書きながら、後にはこれを改変せしむ。（三浦兄弟の会話省略）すなわち相州の御亭に参入し、義盛すでに出軍の由を申す。時に相州囲碁会有り。この事を聞くといえども、あえてもつて驚動の氣無し。心静かに目算を加うるの後、起座して折烏帽子を立烏帽子に改め、水干を装束し、幕府に参り給う。しかるを義盛と時兼と謀合の疑い有りといえども今朝の事に非ざるかの由猶予するの間、御所においては敢えて警衛の備え無し。しかれども両客（広元

・義時)の告げにより、尼御台所(政子)ならびに御台所(実朝室)等営中を去り北御門を出でて鶴岳別当坊に渡御すと云々。申の刻、和田左衛門尉義盛伴党を率いて忽ちに將軍の幕下を襲う。

↓掲出の前半部分は『明月記』と文言まで一致する。↓『吾妻鏡』は『明月記』を原史料として使用し、これに勲功申請書類などの記載を加えて。記事を構成している。

掲出後半部分は、義村と義盛との関係、政子・御台所を逃がした報告者(「両客」)が

『明月記』の「兩人」と矛盾する。広元を襲ったのか、実朝を襲ったのかも違う。『明月記』には義時の囲碁会は書かれていない。

↓『吾妻鏡』は、義村の裏切りという改変(創作)を加えている。

広元・義時の油断があったことは明らか。義時の挑発はやはり疑わしい。

↓事件の鎮圧により、義時・広元に義村を加えたつながりが、より強固になった。

⑦『雑談集』(無住の仏教説話集) 故義時三度の難を逃れて、その身久しく保たる。一には輪田左衛門尉世を乱しし時、故駿河の前司、平六兵衛尉とて、北門堅めたる起請書きながら、反り忠して彼の一門亡びおわんぬ。

↓『吾妻鏡』の義村の裏切りと類似した内容。ただし、『雑談集』の成立は『吾妻鏡』と同じ十四世紀初め(事件の九十年後)。十四世紀初めにはこうした言説がある程度流布していた。『吾妻鏡』編者は『明月記』を原史料として和田合戦記事を作成しつつ、『明月記』にない義村の裏切りの話を加えた。

⑧『古今著聞集』千葉介胤綱三浦介義村を罵り返す事

鎌倉右府將軍家に、正月朔日大名ども参たりけるに、三浦介義村もとより候て、大侍の座上に候けり。其後千葉介胤綱まいたりける。いまだ若物にて侍けるに、おほくの人を分すぎて、座上せめたる義村が猶上にゐてけり。義村しかるべくもおもほで、いきどをりたる気色にて、「下総犬はふしどをしらぬぞよ」と云たりけるに、胤綱すこしも気色かはらで、とりあへず、「三浦犬は友をくらふ也」といひたりけり。輪田左衛門が合戦の時のことをおもひていへるなり。ゆゑしくとりあへずはいへりける。

↓三浦が和田を裏切ったとは書かれていない。和田軍の大敗、義盛の戦死に同族である義村の軍勢が決定的な役割を果たしたことで、十分意味が通る。

#### 【参考文献】

高橋秀樹「鎌倉殿侍別当和田義盛と和田合戦」『三浦一族の研究』吉川弘文館、二〇一六年)

高橋秀樹『三浦義村』(人物叢書、吉川弘文館、二〇二三年)